

ライフサイクルと道德教育に関する考察

A Study on Lifecycle and Moral Education

高橋 勇一

Yuichi Takahashi

Abstract

本稿では、誕生から死に至るライフサイクル（生涯発達）において、よりよく生きるための道德教育に関する一考察を試みた。まずは、発達段階に応じた課題を理解し、それを克服し、健康的なパーソナリティーを成長させていくことが重要である。「特別の教科 道德」の導入については、道德教育を改革する上で一つの好機となりうる。学校教育において、自主・自立やアイデンティティの確立の上で、他者や集団・社会並びに生命・自然等との協調的な関係を築いていく努力が必要である。一方で、道德教育は、その性質上学校教育に限らず、生涯をかけて追求すべき人格の形成（完成）の根幹に関わり、個性化や自己実現の道も重要である。歴史的に哲学や教育学あるいは心理学でも考究されてきた「幸福」をテーマとし、絶えず変化する自己にあっても、ベストを尽くすことが大切である。そして、世代間を通じた教育を通じて、ライフサイクルを継承的に発展させていくことが望まれる。

キーワード：ライフサイクル、発達課題、道德教育、よく生きる、幸福

I はじめに

現代社会は、変化という言葉で象徴されることが多い。私たちの生活を取り巻く政治、経済、産業はもとより、情報、通信、医療、科学技術等、さらにはグローバルな地球環境まで、さまざまな変化が生じている。しかし、時代が変わろうとも、社会が変わろうとも、よりよく生きるという生き方については、不変的かつ普遍的に探究され続けてきている。そして、その生き方は、教育等を通じて次世代に継承されてきている。ところが、いじめ、自殺・殺人、略奪・強盗、そしてテロ・戦争などの犯罪も後を絶たないのが現実である。かつて、宮沢賢治が「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」と述べたように、幸福の探求は、個々人とともに、社会全体が取り組むべき重要課題であり、その解決に向けて牽引すべきは、やはり教育界にあるといえる。

本稿では、まず、私たち人間が共通に経験する誕生（受精）から死に至るライフサイクルに注目する。各発達段階における諸課題について整理し、その克服のための理解を深めることとする。次に、「特別の教科 道德」の導入をはじめとする道德教育の改革について、その内容と展望をまとめ、子どもから大人までのライフサイクルを通じて、よりよく生きるための教育の哲学について考察を深めていく。

II ライフサイクルについて

1. ライフサイクルの定義

ライフサイクルは、生物学用語であり、世代ごとに繰り返される発生と成長に関する規則的変化のプロセスをいう。

森岡によれば¹⁾、「人間の一生に見られる規則的な繰り返し現象である」という。「繰り返し現象といっても、世代1から世代2、世代3へと繰り返されていく現象よりも、同一の世代のなかで、個体AにもBにもCにも繰り返し見られる現象のことである」。

すなわち、個体差にかかわらず、世代内に見られる共通性に注目される概念である。

心理学を代表する一人レビンソンは²⁾、ライフサイクルについて、「①出発点（誕生、始まり）から終了点（死亡、終わり）までの過程または旅という考え」、また、「②ライフサイクルを一連の時期または段階に分けてとらえる「季節」という考え方」と主に2つの概念で把握している。

これを受け、河合隼雄は³⁾、ライフサイクルについて「人間の一生は、人によってさまざまであるが、それはそれぞれひとつの過程としてみる事が出来て、そこには季節の変化があるように、特徴的な節目と変化が見られる」と述べている。

なお、ライフサイクルについては、円環型ライフサイクルをイメージする場合もあるが、教育上は「生

涯発達」という概念とほぼ同じ意味で使用されてきている。死を意識することは重要であるが、死後や輪廻転生（復活、再生）について科学的に扱うことは難しく、課題は、人間の一生（生涯）においてよりよく生きるということになる。

2. 生涯発達（ライフサイクル）の諸課題

生涯発達（ライフサイクル）の課題について明確に示した最初の人物はハヴィガーストとされる⁴⁾。発達課題とは、人生のそれぞれの時期に生ずる課題で、「その課題をりっぱに成就すれば個人は幸福になり、その後の課題も成功するが、失敗すれば個人は不幸になり、社会から認められず、その後の課題の達成も困難となってくる」という。ハヴィガーストは、1930年代のアメリカ社会の特徴から、「乳幼児期」「児童期」「青年期」「壮年初期」「中年期」「老年期」という6段階に分類し、各発達段階における課題を明らかにしている（表1）。

教育心理学上、生涯発達の諸課題に関する代表的な説は、表2のとおりである⁵⁾。

ピアジェは、主に幼児期・児童期の発達について次のようにまとめている^{6,7)}。

まず、「感覚・運動期」（0～2歳）は、見たり、聞いたり、触ったりという感覚やつかんだり、落としたりといった運動によって、外界を知る段階である。次に、「前操作期」（2～6・7歳）では、「自己中心性」という特徴があり、自分の一つの視点で物事をとらえることが多い。また、ごっこ遊びをしたり、絵を描いたり、言語化が進んでいく段階である。そして、「具体的操作期」（6・7～11歳）になると、物を操作できるようになり、自己と他者の視点がわかるようになる。例えば、同量の水を、高さ・底面積が異なる容器に移した時に、水量は同じであるという「保存課題」には成功するが、「密度」のような抽象的な概念は、うまく扱えない。最後に、「形式的操作期」（11歳～成人）に至り、この段階では、抽象的・論理的思考が必要な概念についても理解が進む。

したがって、「密度の問題」や「天秤課題」なども、科学的に理解できるように成長する。いわば、発達心理あるいは認知科学の視点からのまとめといえる。

ライフサイクル論で、最も有名な人物は、やはりエリクソンであろう^{8,9)}。エリクソンは、フロイトの発達論（前半五つ）にユングの理論（後半三つ）を

加味し、有名な8段階のライフサイクル・チャートを作成したといわれている。それは、各発達段階における心理・社会的危機を克服しながら、健康なパーソナリティーを成長させることができるというものだ。

I：乳児期の心理・社会的な危機は、「基本的信頼」対「基本的不信（basic trust vs. basic mistrust）」である。両親（特に母親）など養育者と基本的な信頼関係を築く時期で、失敗すると不信感を抱く。

II：幼児期初期は、「自律性」対「恥・疑惑（autonomy vs. shame, doubt）」である。感覚能力や運動能力が発達し、トレーニングを通じて自律性・自立性を養う時期であり、恥や疑いの感情も生まれる。

III：遊戯期（幼児期中・後期）は、「自主性」対「罪悪感（initiative vs. guilt）」である。活動範囲が広がり、自主性を育む時期で知的活動も活発になる一方で、罪悪感を覚えることもある。

IV：学童期は、「勤勉性」対「劣等感（industry vs. inferiority）」である。学校などの集団生活の中で、勤勉性や規律性を養う時期であり、他人との比較の中で劣等感等も感じる。

V：青年期は、「同一性」対「同一性混乱（identity vs. identity confusion）」である。本当の自分を探し、アイデンティティ（自分らしさ）を確立する時期であるが、失敗すると自分が何者かわからない状態に陥る。

VI：前成人期は、「親密」対「孤立（intimacy vs. isolation）」である。家庭や職場を通じて他者との親密な関係を築く時期である一方で、孤立する危険性もある。

VII：成人期は、「生殖性」「世代性」（ジェネラティヴィティ）対「耽溺・停滞（generativity vs. self-absorption and stagnation）」である。家族や社会に広く目を向け、子ども部下など次世代の人間を育てる時期である一方で、仕事・家事等で、停滞する感覚を持つこともある。

VIII：老年期は、「統合」対「絶望（integrity vs. despair）」である。これまでの人生経験や知識を総合すること（総まとめ）が課題である一方で、死が近づき絶望感を味わうこともある。

表 1. ハヴィガーストによる発達課題のまとめ

1. 乳幼児期
<p>歩行の学習、固形の食べものをとることの学習 話すことの学習、大小便の排泄を統御することの学習（排泄習慣の自立） 性の相違および性の慎みの学習、生理的安定の獲得 社会や事物についての単純な概念形成 両親、兄弟および他人に自己を情緒的に結びつけることの学習 正・不正を区別することの学習と良心を発達させること</p>
2. 児童期
<p>ふつうのゲーム（ボール遊び、水泳など）に必要な身体的技能の学習 成長する生活体としての自己に対する健全な態度の養成 同年齢の友だちと仲よくすることの学習、男子または女子としての正しい役割の学習 読み、書き、計算の基礎的技能を発達させること 日常生活に必要な概念を発達させること 良心、道徳性、価値の尺度を発達させること （内面的な道徳の支配、道徳律に対する尊敬、合理的価値判断力を発達させること） 人格の独立性を達成すること（自立的な人間形成） 社会的集団ならびに諸機関に対する態度を発達させること（民主的な社会的態度の発達）</p>
3. 青年期
<p>同年齢の男女両性との洗練された新しい関係 自己の身体構造を理解し、男性または女性としての役割を理解すること 両親や他のおとなからの情緒的独立、結婚と家庭生活の準備 経済的独立に関する自信の確立、職業の選択および準備 市民的資質に必要な知的技能と概念を発達させること （法律、政治機構、経済学、地理学、人間性、あるいは社会制度などの知識、民主主義の問題を 処理するために必要な言語と合理的思考を発達させること） 社会的に責任ある行動を求め、かつ成し遂げること 行動の指針としての価値や論理の体系の学習、適切な科学的世界像と調和した良心的価値の確立 （実現しうる価値体系をつくる。自己の世界観をもち、他人と調和しつつ自分の価値体系を守る）</p>
4. 壮年初期
<p>配偶者の選択、結婚相手との生活の学習 家庭生活の出発（第一子をもうけること）、子どもの養育、家庭の管理 就職 市民的責任の負担（家庭外の社会集団の福祉のために責任を負うこと） 適切な社会集団の発見</p>
5. 中年期
<p>おとなとしての市民的社会的責任の達成、一定の経済的生活水準の確立と維持 十代の子どもたちが信頼できる幸福なおとなになれるよう援護すること おとなの余暇活動を充実すること 自分と自分の配偶者をひとりの人間として結びつけること 中年期の生理的变化を理解し、これに適応すること 老年の両親への適応</p>
6. 老年期
<p>肉体的な強さと健康の衰退に適応すること 隠退と減少した収入に適応すること 配偶者の死に適応する 自分と同年輩の老人たちとあかるい親密な関係を確立すること 肉体的生活を満足に送れるよう準備態勢を確立する</p>

【出典】 矢野喜夫・落合正行著：発達心理学への招待，サイエンス社，1991年
 ハヴィガースト,R.J（荘司雅子監訳）：人間の発達課題と教育，玉川大学出版部，1995年

生涯発達（ライフサイクル）全体を俯瞰して、ポイントとなる分岐点や社会的秩序に係る要素を予め把握しておくことは重要なことといえる。

そして、コールバーグは、ピアジェの発達段階説を継承しつつ、道徳性の発達について、3水準6段階の発達段階説を提示している¹⁰⁾。コールバーグはこれらの発達段階に順序性があることを認めているが、どの年齢段階がどの発達段階に該当するかは必ずしも明らかにしていない。社会や文化によって発達段階は異なるからである。表1は、おおよその年齢の目安程度のものである。

「前慣習的水準」の段階1は、「罰と服従への志向」であり、苦痛と罰を避けるため、大人の力に譲歩し、規則に従う。自己中心的視点が強い。段階2は、「道具主義的・相対主義志向」であり、自分の要求・利益にかなう規則に従うが、他者も同様の要求を持つことを認め、誰かの直接の利益になるときだけ規則に従う。具体的・個人主義的視点が特徴である。

「慣習的水準」の段階3は、「対人的同調、『よい子』志向」であり、他者を喜ばせ、他者を助けるために「よく」振る舞い、それによって承認を得る。他人との関係における個人の視点が目立つようになる。段階4は、「法と秩序」志向であり、権威を尊重し、社会的秩序を維持することによって、自己の義務を果たす。ある行為を誰もが行ったときの体制の崩壊を避けるため規則に従う。

そして、「慣習以後の原則的水準」の段階5は、「社会契約的法律志向」となり、他者の権利について考え、全体の幸福とすべての人の権利を守るために法律を作成し、それに従うという社会的契約によって法律への義務感があると考え。最後の段階6は、「普遍的な倫理的原理志向」であり、実際の法や社会の規則を考えるだけでなく、自らが選択した倫理原則と人間の尊厳性への尊重を考える。ここでは、道徳的立場に立つ視点となり、徳目として、普遍的慈悲と普遍的正義を重要な要素とする。

Ⅲ 道徳教育について

1. 新しい道徳教育が目指すもの

いじめ・自殺や青少年の犯罪等が繰り返される中で、道徳教育に一つの大きな転機が訪れている。学

校教育法施行規則の中の「道徳」が、「特別の教科 道徳」（以下、「道徳科」という。）に改められ、小学校は2018（平成30）年度、中学校は2019（平成31）年度から道徳科が完全に実施される。この道徳科については、学習指導要領も、学習指導要領解説も既に公表されている^{11),12)}。

学習指導要領には、道徳教育の目標について、次のように述べられている。

「学校における道徳教育は、特別の教科である道徳を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道徳科はもとより、各教科、(外国語活動)、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、児童(生徒)の発達段階を考慮して、適切な指導を行わなければならない。」¹³⁾ ^(注1)

「道徳教育は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づき、自己の生き方(人間としての生き方)を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者とともによりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とする。」¹³⁾

すなわち、「教育基本法」第1条のとおり、教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期すべきだということである。また、学力の3要素である①知識と技能、②思考力・判断力・表現力、③主体性をもって多様な人々と協働して学ぶ態度を培うことが重要である。

そして、「特別の教科 道徳」の目標は、次のように記されている。

「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を(広い視野から)多面的・多角的に考え、自己の生き方(人間としての生き方)についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。」¹³⁾

ここで養った道徳性をもとに、どうよりよく生きるか。今後は、道徳的な事柄を知っていることではなく、道徳的知識やスキルを活用することが重視される。自ら進んで自己の課題を発見するとともに、主体的かつ協働的に、その課題解決の道を探すべきであろう。

また、学習指導要領解説には、次のようにも記さ

れている。「道德教育は、人が一生を通じて追求すべき人格形成の根幹に関わるものであり、同時に、民主的な国家・社会の持続的発展を根底で支えるものでもある。また、道德教育を通じて育成される道德性、とりわけ、内省しつつ物事の本質を考える力や何事にも主体性をもって誠実に向き合う意志や態度、豊かな情操などは、『豊かな心』だけでなく、『確かな学力』や『健やかな体』の基盤ともなり、『生きる力』を育むために極めて重要なものである。」¹⁴⁾

もちろん、小中学校における道德教育をよりよいものに改善していく努力は必要である。しかし、一生を通じて追求すべく人格形成であるゆえ、高校生、大学生はもちろん、私たち大人も含めて、生涯かけて道德教育の理想を探求すべきとなる。

また、貝塚が述べているように、道德とは、「めざす『道』と備える『徳』との二重の意味」を担い、「社会や共同体で共有されてきた規範を『道』としつつ、これが普遍的な価値となりうるかを主体的に吟味し、『徳』として内面化する姿勢を保つこと」¹⁵⁾をいう。すなわち、道德は、学校教育の範囲にとどまらず、青壮年期・高齢期に至っても、持続的にその実現を目指すものとなる。

2. 道德教育の内容について

今回の学習指導要領改訂から、内容項目の視点は、「A 主として自分自身に関すること」「B 主として人とのかかわりに関すること」「C 主として集団や社会とのかかわりに関すること」「D 主として生命や自然、崇高なものとのかかわりに関すること」となっている¹⁴⁾。四つのかかわりごとの指導内容は従来通りであるが、順番において、「集団や社会とのかかわりに関すること」と「生命や自然、崇高なものとのかかわりに関すること」が入れ替わり、認識の発達の流れとしてスムーズになっている。

また、今回、キーワードが明記されるようになっている。具体的には^(注2)、Aには、「自主、自律、自由と責任、節度、節制、向上心、個性の伸長、希望と勇気、克己と強い意志、真理の探究、創造」がある。Bには、「思いやり、感謝、礼儀、友情、信頼、相互理解、寛容」が挙げられている。Cは、「遵法精神、公德心、公正、公平、社会正義、社会参画、公共の精神、勤労、家族愛、家庭生活の充実、よりよい学校生活、集団生活の充実、郷土の伝統と文化の

尊重、郷土を愛する態度、我が国の伝統と文化の尊重、国を愛する態度、国際理解、国際親善」である。そして、Dには、「生命の尊さ、自然愛護、感動、畏敬の念、よりよく生きる喜び」が含まれている。各成長段階に応じて、これらの項目を達成できれば、理想的ともいえる個人及び社会に到達できるはずであろう。

しかし、現実的には、厳しい状況もある。人間は、多様で複雑な感情を持ち合わせており、思いどおりには行動できないことも少なくない。時には、思いとは逆の行動に出てしまうこともある。まずは、さまざま葛藤や困難を受けいれつつ、未来に向けてどうしたいのかという本心の声に耳を傾けることが大切であろう。

特に、「よりよく生きる喜び」という新たな項目は、道德教育の本質の一つであると言われる¹⁵⁾。このことを教育するにあたっては、私たち大人がマンネリ化せず、日々新鮮な感覚を体験することが重要である。そのためにも日々の生活において、新しい挑戦をし続けるべきなのだろう。

また、「道德科」の教材については、「児童(生徒)の発達や特性、地域の実情等を考慮し、多様な教材の活用に努めること」、そして、「特に、生命の尊厳、社会参画、自然、伝統と文化、先人の伝記、スポーツ、情報化への対応等の現代的な課題などを題材とし、児童(生徒)が問題意識をもって多面的・多角的に考えたり、感動を覚えたりするような充実した教材の開発や活用を行うこと」と記されている¹⁴⁾。

一般に、「感動」を伝えるためには、その人自身が「感動」を味わっておく必要がある。知的で冷静な判断ももちろん重要であるが、一方では、感性で純粋に感動する体験も貴重な要素として記憶に蓄積しておく必要がある。身近なところでは、オリンピックをはじめスポーツを通じた感動、読書や映画等を通じた感動、芸術(音楽含む)や自然から得る感動、ホスピタリティや親切から覚える感動など、教育的要素となるものを探し集めておくことも重要であるといえる。

IV まとめと考察

1. 目標の明確化

ライフサイクルには、発達の段階に応じた各課題

があり、それを克服して健康な成長を遂げることになる。その生涯発達における目標について、エリクソンによれば、生殖性・世代性 (generativity) を経た後の統合・完成 (integrity) であり、コールバーグによれば、最終の段階 6「普遍的な倫理原理志向」ということになる。この段階に到達した人物として、コールバーグは、ソクラテス、仏陀、イエス・キリスト、リンカーン、ガンディーを列挙しているが、「七十にして心の欲する所に従って、距を踰えず」という境地に達した孔子にも通じるところがある。エリクソンに影響を与えたユングによれば、「私の一生は、無意識の自己実現の物語である」¹⁶⁾ というように、個性化の過程を経た自己実現が人生の目標ということになる。

いずれにせよ、人生の目標を明確化することは道徳教育の重要な使命であるといえる。このテーマについて、ギリシャ哲学では明快な解答を与えている。プラトンは、「徳」を「最善の状態」とした上で、「幸福」を「あらゆる善いものから合成された善」であり、「徳による完成」と定義づけている¹⁷⁾。アリストテレスは『ニコマコス倫理学』¹⁸⁾の中で、幸福はいろいろな定義があるとしながらも、人生の最終目的(最上の善)は「幸福」(よく生きること)にほかならないと明言している。そして、人間は「自然本能的にポリス的」であるから、範囲の議論はさておき、国民全体の幸福を願うことになるという。

つまり、道徳教育は、人格の完成をめざし、個人及び家族の幸福、社会及び国家の福祉の充実、そして世界の平和と繁栄に結びつくべきものである。

2. 発達段階における諸課題の克服

ライフサイクルでは、成長の段階に応じて、さまざまな課題や危機があることを学んだ。その障壁を乗り越えるためには、予め想定される課題を理解するとともに、成長がどのように進むのかを把握しておくことが重要である。例えば、成長曲線とプラトー現象について配慮する必要がある。

図1のように成長曲線のイメージは、一般に右肩上がりとなる。しかし、現実には、プラトー(高原)といわれる伸び悩みの期間がある。時には、スランプ状態が続くばかりか、後退や退化することも起こりうる。この時をどう乗り越えるのかは、次の名言がヒントになるだろう。

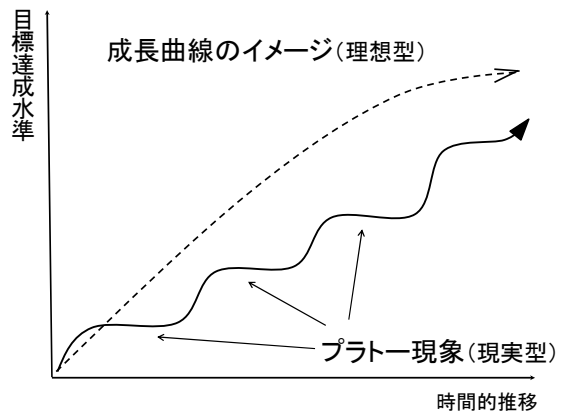


図1. 成長曲線とプラトー現象

日米の野球界で活躍してきているイチローは、次のように語っている¹⁹⁾。

「夢や目標を達成するには1つしか方法がない。小さなことを積み重ねること。」

「ここまで来て思うのは、まず手の届く目標を立て、ひとつひとつクリアしていけば、最初は手が届かないと思っていた目標にもやがて手が届くようになる。」^(注3)

また、経営の神様と称された松下幸之助は、次のように述べている²⁰⁾。

「失敗の多くは、成功するまでにあきらめてしまうところに、原因があるように思われる。最後の最後まで、あきらめてはいけないのである。」

「たとえ平凡で小さなことでも、それを自分なりに深く噛みしめ味わえば、大きな体験に匹敵する。」^(注4)

異分野の優れた人物ではあるが、成功に向けては、共通する内容を含んでいる。誠実に一步一步努力を積み重ねていくと同時に、未来志向的にあきらめない精神は重要である。

ところで、ユングは、人生の後半の意義を唱え、本当にその人自身になっていくという個性化(individuation)・自己実現(self-realization)のプロセスを重視した。この個性化(自己実現)の過程は、「個人に内在する可能性を実現し、その自我を高次の全体性へと志向せしめる努力の過程」²¹⁾であり、人生の究極の目的と考えた。しかし、例えば「中年の危機」というように、その過程においては厳し

い困難（病気や事故を含む）に直面することが多々ある。そして、それを乗り越えられれば、「クリエイティブ・イルネス（創造の病）」というように、優れた成果をあげることがあるようだ。

3. 道德教育の展望

これからの道德教育については、押谷らが提案するように、(1)教育の基調を人格形成に戻す、(2)学校を教育愛に満ちた場にする、(3)子どもが大志を抱く道德教育にする¹⁵⁾、という方向は確かであろう。科学的・合理的であることは重要であるが、極端な客観性、批判的精神並びに厳密性は冷徹さに通じてしまう。道德は、主観性、受容的精神並びに寛容性を重視する。一度、細分化・要素還元を行うとしても、最後は、ホリスティックな視点で諸要素の繋がりについて考察する方が、大局を見誤らない。また、かつて、人間の幸福は、事物の真なる認識による全自然との合一（「精神と全自然との合一性の認識」）にあると述べたスピノザに学び、知性を改善し、純化して真なる認識、真なる観念に至る道を探究すべきであろう²⁰⁾。

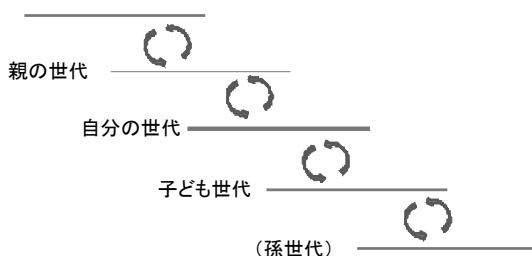
また、これからの学校の在り方について、「一人ひとりを大切に」「ファミリー（家族）的なものにする」「地域の学習ターミナルにする」¹⁶⁾ことに異論をはさむ余地はないと思われる。そして、道德教育は、プラス志向で未来意志力を育む教育であるべきであろう。「成長する喜びを実感する」「未来への希望をもつ」「ともによりよく生きることへの勇気をもつ」¹⁷⁾など、いずれも重要な要素である。また、自己肯定感・自尊感情を高めることをベースとし、できることを少しずつ増やし学習成果を獲得していく教育も大切であろう。

なお、科学技術の進展と合わせて、産業構造等の変化が予想され、学校と産業界との協働の在り方も検討されていくことになる。同時に、道德教育においても、人や集団や社会とのかかわり方、生命や自然並びに崇高なものとかかわり方に加え、機械・ロボットや人工知能（AI）を含む人工物全般とのかかわり方や管理の在り方も検討すべき課題となるだろう。

4. ライフサイクルの継承—世代を超えて—

ライフサイクル（生涯発達）を考慮した目標の明確化、発達段階の諸課題に対する克服・解決、そし

て、人格主義を重視した道德教育の展開は、現世代から次世代へ、さらには未来世代へと継承すべきものである。西平が述べるように、エリクソンのライフサイクル論は、「個体の発達」のみならず、「世代と世代との関係」にも注目していた。一つのイメージとしては、図2のようになる。



【出典】鈴木・西平『生涯発達とライフサイクル』（東京大学出版会 2014年）

図2. 四世代の重なり

つまり、「<孫の世代>、<子どもの世代>、<自分の世代>、<その親の世代>という四つの世代が積み重なっている。（中略）互いにかみ合う四つの世代の歯車である。エリクソンは、そうした<育て一育てられる>関係の織物の中で、人の人生を見ていた」²³⁾という。

家族モデルをベースとした円環型ライフサイクルにすると、図3のように考えられる²⁴⁾。これは、ガウス平面（複素平面）からヒントを得、「虚数*i*（想像数=imaginary number）」と日本語の「愛（ai）」の発音が一致することから考案したものである。すなわち、大きさ1の複素数を考え、虚数*i*をかけるという操作が、90度回転（反時計回り）に相当し、 $1 \times i = i$ 、 $i \times i = i^2 = (-1)$ 、 $i^2 \times i = i^3 = (-i)$ 、 $i^3 \times i = i^4 = (1)$ というように、*i*を4回かけると（360度回転して）元に戻る。

家族の中で誕生した後、私（I）は、子女愛（親孝行）、兄弟（姉妹）愛、夫婦愛、そして親の愛（父母愛）という4つの愛を培って次世代（子どもの世代）を育てていく。そして、子どもの世話が終わった後に、今度は、子どもの世代が孫の世代を育てるのを見守っていくことになる。この継承的な発展は主な流れといえるが、現代社会において、家族は多様な形態が認められることも付記しておく。

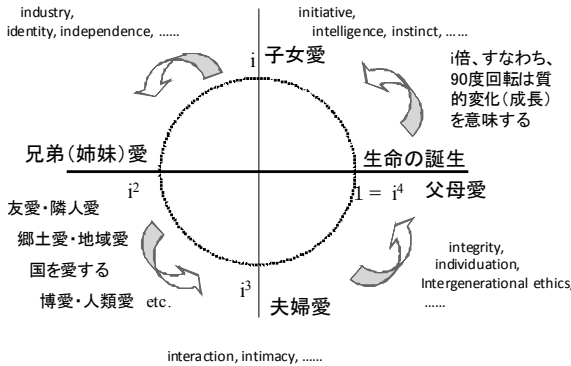


図3. 家族モデルにおける円環型ライフサイクル

また、ライフサイクル(生涯発達)論においては、偶然にも「i」で始まる重要なキーワードが多い。例えば、innocence(無邪気)、instinct(本能)、intelligence(知能)、initiative(自主性)、industry(勤勉性)、identity(同一性)、independence(自立)、intimacy(親密)、individuation(個性化)、integrity(統合・完成)などがある。この他に、improvement(改善・向上)、interaction(相互作用)、instruction(教授・指導)、次世代への継承という意味で、inheritance(継承)、intergenerational ethics(世代間の倫理)などもある。

そして、次世代への継承、すなわち、教育という観点を含め、時間的な流れを考慮すると、図4のようなイメージになる。自らが健康なパーソナリティーを成長させながら、持続可能な発展を達成するためには、量的な拡大よりも質的な充実を図ることが重要であり、世代間倫理を意識した教育政策も重視すべきであろう。

【健康なパーソナリティーの成長】

(孫の世代) → 子ども世代 → 自分の世代 → 親の世代

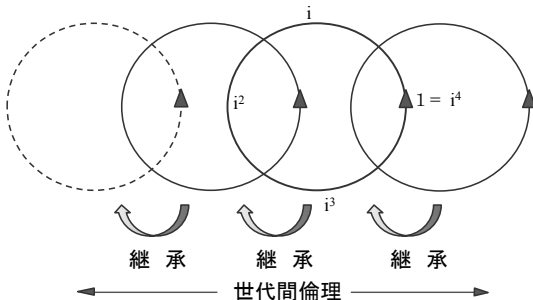


図4. ライフサイクルと次世代への継承

V 最後に

子ども(児童、生徒、学生含む)の教育は、その人自身へのサポートの他、保護者や家族、交友関係なども含む周囲への環境対応も考慮に入れるべきであろう。特に両親をはじめ養育者の影響を受ける期間では、養育者の心理・社会的危機等についても理解しておく必要がある。ライフサイクル全体の課題を把握しておくことで、子どもの状況を総合的に理解することができ、より有効的な教育的アドバイスを行うことが可能になると考えられる。

道徳が特別の教科となり、新しい道徳の時代をつくるにあたり、教育学はもちろん心理学の貢献度が大きいのは確かであろう²²⁾。歴史的には、二千数百年前から、宗教や哲学(愛知:philosophy)の中で道徳については考究されてきた。そこで、一方では、歴史的な精神史・哲学史に対する理解を深め、善なる価値あるものを発掘して、現代に活かすことが重要となろう。もう一方では、最先端の科学的知見等も踏まえて、個人が自己実現を成就するとともに社会全体の幸福度が高まるような生き方を模索する必要もあるだろう。

なお、ロジャーズが言うように、「人生は、その最善の状態においては、流れゆき、変化していくプロセスである。そこでは、固定されたものは何一つない²³⁾ということも真実であろう。社会システム(人間社会のほか自然環境や人工物等を含む)も私自身も、時々刻々と変化する中で、臨機応変にベストを尽くし、「よりよく生きる」道を探し続けることが大切であるといえる。

※本稿は、平成28年度武蔵丘短期大学免許状更新講習「ライフサイクルと道徳教育」(選択必修領域)における講義内容を基本に、加筆・修正・一部修正したものである。

【注釈】

- 1) ()内は『中学校学習指導要領』による。
- 2) 内容項目のキーワードは、『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』による。
- 3) 4) 文末について、「である調」で統一するために一部を変更している。

【参考・引用文献】

- 1) 森岡清美 (1977) 『現代家族のライフサイクル』 培風館
- 2) レビンソン, D.J (南博訳) (1992) 『ライフサイクルの心理学』 講談社学術文庫
- 3) 河合隼雄 (1989) 「ライフサイクル」 (『生と死の接点』 岩波書店、pp.3-75
- 4) ハヴィガースト, R.J (荘司雅子監訳) (1995) 『人間の発達課題と教育』 玉川大学出版部
- 5) 和田万紀編 (2014) 『Next 教科書シリーズ 教育心理学』 弘文堂
- 6) ピアジェ, J (滝沢武久訳) (1968) 『思考の心理学』 みすず書房
- 7) ピアジェ, J 他 (波多野完治・須賀哲夫・周郷博共訳) (1969) 『新しい児童心理学』 白水社
- 8) Erikson, E・H (1980) Identity and Life Cycle, New York : W. W. Norton & Company, Inc. (西平直・中島由恵訳 『アイデンティティとライフサイクル』 誠信書房、2011)
- 9) エリクソン, E・H / エリクソン, J・M (村瀬孝雄・近藤邦夫訳) (2001) 『ライフサイクル、その完結<増補版>』 みすず書房
- 10) コールバーグ, L 他 (岩佐信道訳) (1987) 『道徳性の発達と道徳教育』 広池学園出版部
- 11) 貝塚茂樹・関根明信編 (2016) 『道徳教育を学ぶための重要事項 100』 教育出版
- 12) 松尾直博 (2016) 「道徳性と道徳教育に関する心理学的研究の展望—新しい時代の道徳教育に向けて—」 教育心理学年報第 55 集 (日本教育学会)、pp.165-182
- 13) 文部科学省 (2015) 『小 (中) 学校学習指導要領』
- 14) 文部科学省 (2015) 『小 (中) 学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』
- 15) 押谷由夫編 (2016) 『道徳教育の理念と実践』 放送大学教育振興会
- 16) ユング著・ヤッフェ編 (河合隼雄訳) (1972) 『ユング自伝 1』 みすず書房
- 17) プラトン (向坂寛訳) (1975) 「定義集」 (『プラトン全集 15』) 岩波書店
- 18) アリストテレス (神崎繁訳) (2014) 『ニコマコス倫理学』 (『アリストテレス全集 15』) 岩波書店
- 19) 地球の名言「イチローの名言」 <http://earth-words.org/archives/956> 2016年8月7日閲覧
- 20) 地球の名言「松下幸之助の名言」 <http://earth-words.org/archives/1221> 2016年8月7日閲覧
- 21) 河合隼雄 (1967) 『ユング心理学入門』 培風館
- 22) スピノザ (畠中尚志訳) (1968 改訳) 『知性改善論』 岩波文庫
- 23) 鈴木忠・西平直 (2014) 『生涯発達とライフサイクル』 東京大学出版会
- 24) 高橋勇一 (2003) 「長江流域における持続可能な生態村に関するメンタルモデル」 学際研究 No.59、pp.48-58
- 25) ロジャーズ, C.R. (諸富祥彦他訳) (2005) 『ロジャーズが語る自己実現の道』 岩崎学術出版社